

真・恋姫無双～耳籠絡
伝～

shizuru_H

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

短編 or 短編集

耳かきって良いよね

目次

春蘭の場合

1

春蘭の場合

「あつ、あう、だめ、ほ、ほん、北郷つ、いきなりそんな奥まで。。。」

「うるさいぞ、春蘭。あんまり騒ぐと外に聞こえるぞ」

「そんな、つこと、言われても…あつ、また。。。」

「へえ、ここが弱いんだ？じゃあもう少し…」

「あつ、だから！やめっ!!あう。。」

「可愛いなく春蘭は」

自分の下で可愛らしく鳴く、いのしs…もとい美少女を見て一刀は、

「華琳に見られたらやばいなあ」

愛おしいと思いつつ、こうなった原因を思い出していた。

透き通るような青空、ふかふかの緑芝、寝転がるにはちようど良い坂、たまに吹く生暖かい風は心地よく、北郷一刀はたまの非番を太陽の下で満喫していた。

戦時中の偽りの平和とはいえ、久しぶりの休みを満喫しても誰にも咎められないだろう。

「と言う訳で、一休み一休み…」

誰もいるわけではないのに、言い訳をしてしまうのは、霸王たる少女に使える事に毒されすぎたかな。。。

「はっ！せやあ！ふっ！」

安眠を貪っていると、目の前で威勢の良い声が聞こえてきて、目を覚ました

赤い死装束に髑髏を模した鎧、身の丈程もある黒刀、それを振るうは長い黒髪を靡かせた片目の鬼人。

魏の大剣、夏侯惇。その人だった。

女の子が剣をふるう。

それが当たり前の時代。

早く平和になってほしい。

いつもそう思う。

目の前で頑張る少女が、剣ではなく、別の何かに打ち込めるような。誰も悲しまなくていいような世界に。

しかし、きっとこの少女は戦いが終わってもこうやって剣をふるうのだろう。

「まあ、頭動かすよりは体動かしてる方があつてそうだもんなく」

「誰の頭が可愛そうだつて!!」

ビュンツ

「うおっ」

いきなり大剣が目の前を通過したかと思うと、なんか飛んでもない聞き間違いをしたやつがいる。

「誰もそんなこと言つてない!」

「嘘だ! 私の耳にはちゃんと聞こえたぞ!」

「どんなだよ。耳垢たまつてうまく聞こえてないんじゃないか?」

ギヤーギヤー

ワーワー

いつも通りたわいないことで騒いで、追い掛け回されて、最後は二人で霸王様の前に正座させられて。。。

幸いなことに霸王様も今回のことは誤解とわかつているようなので(というか大半が

誤解だが。。)

春蘭への貸し一つということで、解放された。

誤解だとわかってるなら、一緒に正座させないでほしい。

あの笑顔は分かかってやってるんだろうが。

うん、もつと普通の平和になってほしい。。。

「びゃっ!!」

「!!?」

その夜夕食を終え、凧達と談笑し部屋に帰る途中に、絶叫が一刀の耳に飛び込んできた。

部屋場所は。。。

「春蘭か。。。」

昼間のこともあるので、

あまり関わりたくないなあ〜どうしたものかな〜

と悩んでいると、

「びゃ!?!」

再度悲鳴のような声が、

「ちよ、ちよつと、どうしたんだ春蘭?」

ガチャ

「!? ほ、ほんごお〜」

部屋の入ると、涙目で小刀を耳にぶつ刺す猪…春蘭がいた。

「な、なにしてるんだ!?!」

「なにつて、見てわかるであろう? 耳かきをしているのだ」

「耳、かき…?」

よく見れば春蘭の右手には、細い木の棒、耳かきが握られていた。順手で。。。

「つて順手?!?!」

普通耳かきは箸を持つように指で挟むのだが、この猪は愛刀を握るのと同様の握り方をしていたのだった。

「何を言ってるのだ? 耳かきとは、こうやって」

カリッ

「〜こ〜」

カリッ

「やって」

カリッ

「こうする」

ガリッ

「びゃああ!!」

「…まあ、そうなるよな」

そもそも細かい作業が苦手な春蘭のことだから、得意ではないだろうと思っていたが、

まさかここまでとは。。。

「な、なんだ北郷！なにか言いたいことでもあるのか!!」

キンッ

どこからか自慢の愛刀を振りかざし、涙目で睨んでくる

「え、ええと、俺がしてやろう…か？」

ポンポンッ

「はい春蘭、膝枕」

「なっなんd」

「いうこと聞くつて言ったよね？」

「ん、んん〜」

悔しそうにしながらも何も言わずに頭を預けてくる

まあ春蘭貸しを作っておいても、そのうち忘れてしまうので

今ここで使うことにした。

そのうち忘れてしまうので!!

「。。。」

「貴様、頭が軽いとか思っただろう？」

「べ、べつにソソナコトハオモツテナイデスヨ…」

本気で思ってしまった。

「やっぱり止める！」

「まあまあ」

ナデナデ

「んっ」

起き上がろうとする春蘭の頭を撫でて、とりあえず落ち着かせることには成功した。

意外と甘やかされるのに弱いのだ。

「さて、まずは中の手前からだな」

「痛くしたら殺すからな！」

「はいはい、始めるからもう動くなよ」

「うう」

横目で睨んでくるが、おとなしくはしてくれるようだ。

華琳様の命令の効果もあるがね。

「入れるぞ」

「ん、うむ。」

スツ、

「先ずは手前のところから」

かりかり、こりっ、かりかり、こりっ

「やっぱり手前のところはたまりやすいな」

「そうなのか？」

「うん、ところで痛くない？」

「あ、ああ大丈夫だ」

「じゃあ続けるぞ」

かりっ、かりっ

「おっと大物があるな、もう少し奥に入れるぞ」

「う、うむ」

すぷっ、

かりかり、かりかり、こりっ

「んっ」

「あ、ごめん、痛かった？」

「い、いや、大丈夫だ」

「OK、じゃあ続けるよ」

かりっ、かりっ、するっ

「おっ、思ってたより大物が釣れたよ」

「おお、本当だ、こんなのが私の中に入っていたのか！」

寝たまま視線だけを向けると、良い感じに大きい耳垢が耳かきの先に乗っかっていった。

「もうちよつと細かいのも取るから動くなよ」

「分かった！」

良い感じの大きさが繋がったのが嬉しかったのか、笑顔で目を閉じる春蘭。

すつ、すつ、すつ

今度は耳かきの先が薄く当たるように調整しながら、
何度も素早くかき出す。

「ん〜」

「お、痛かった？」

「ん〜大丈夫〜」

段々猫みたいになってきたな。

「ん〜」

「あ、そこ、、」

「北っ、」

「ふ〜」

「びやつ〜！」

もつと〜とぐずる春蘭の頭を反対にし、両耳ともにいい感じにきれいにしてやると、
ずいぶんと時間が経っていた。

そしてその頃には、魏武の大剣様はただの猫な変わっておりましとさ

「なあ北郷」

「ん？どうかした？」

「。。。 剣などではなく、皆耳かきを持って笑ってる世界にしたいな」

「。。。 そうだね」

平和のために明日からも頑張らないと

~~~~~

『あつ、あう、だめ、ほ、ほん、北郷っ、いきなりそんな奥まで。。。』

『うるさいぞ、春蘭。あんまり騒ぐと外に聞こえるぞ』

『そんな、つこと、言われても…あつ、また。。。』

『へえ、ここが弱いんだ？じゃあもう少し…』

『あつ、だから！やめっ!!あう。。。』

『可愛いなく春蘭は』

『本当に可愛いなく姉者は。。。』

『華琳に見られたらやばいなあ』

『安心しろ北郷、見ているのは私だけだから』

『だからもつと姉者を可愛く。。。ふふふっ』